

肉体と象徴について

郡 司 正 勝

この夏、早池峰フェスティバルの「アジアの身体」というシンポジウムに参加したときに、東北の巫女舞、山伏神楽など多く集ったほかに、韓国の巫女舞やインドのケララ州の仮面劇などを同時に、同場所でみているうちに、いったい東洋では、身体をどう考え、どうした望みや願いを託してきたのか、いや、ときによると、身体への拒否の方が大きかったのではなかったかと想うようになった。

いったい「身体」とか「肉体」「体躯」という語は、本来の日本語ではなかった。あるいは用いられてきても、その内容は、西洋のそれと内容が入れ替っているのではないか。「体操」という語は、あるいは明治以来の学校教育のなかで、かなりの伝統をもってきているが、「体育」などという語は、戦後のごく最近の観念のようにおもわれる。詳しくは調査していないが、こうした、身体教育と結びつき、運動学・表現体育などといわれるのは、一貫して学校教育のなかで植えつけられてきた西洋直輸入の身体概念を基本として基き上げられたもので、東洋におけるわれわれ東洋人の身体概念を、まったく無視したうえの処置であったことは、いまさら云うまでもなからう。

したがって、その上に立って成立してきた西洋の舞踊の方向をもつて、東洋のあるいは、日本の舞踊を考えることの誤りや、あるいは正しさ、またその創造性を考えることの問題や行き違いを考えてもみてこなかったのが、これまでの歴史でなかったのではあるまいか。

これらについては十分に論文として尽す要があるのだが、そうした余裕がいまはないし、間違いが多かろうとおもうが、まず、東洋の身体論と舞踊の関係を待望するあまり、いまは想いつきの程度を出さないが、感想序説とでもいったものを点出してみたい。

まずはじめに、日本では、身体のことをなんといってきたのか、またその意味はということになるが、漢語では、「体躯」「身躯」という語があり、「躯」「體」が、日本語の「からだ」にあたる。『言海』によると、日本語の「からだ」は、「から=だ」で、「乾立ノ略カ」という。

「から」は、空、虚殻で、「亡骸」(なきがら)の「から」である。「だ」は、「立」だとすれば、「からたち」で、「立ち」は、生きていること、在存していること、示顯していることで、日本語の「立ち」については、かなり複雑な意味深さをもっている。

とにかく、「からだ」とは、空虚なもので、こ

の点からしても、西洋的身体、肉体とはちがう概念から出発していることはあきらかであろう。

「からだ」体がすでに死体をあらわしている場合もあるので、『義経記』(八巻)などにも「むなしきからだに向ひて嘆き給ひけるは」などと用いるのである。

この「からだ」を、日本人は、古来から、「うつせみ」と形容し、「空」ということと「身」ということと同視してきた文学の伝統がある。

「うつせみ」は、「空蟬」とも書き、蟬の脱げがらのことである。

空蟬のからは木ごとにとどむれど魂の行方を見ぬぞ悲しき(『古今集』巻之十・読人不知)
うつせみの世の人言のしげければ忘れぬ物の
かれぬべらなり(同、巻之十四・読人不知)
のごとく、魂のない空の入れものであり、頼りにならぬ世の人の身のこととしたのが、日本の身体論のはじまりであったことは、知っておかなくてはなるまい。

『源氏物語』に、「空蟬の世はうきものと知りにしを」(巻之四・夕顔)とか、「羽衣のうすきにかはる今日よりは空蟬の世ぞいと悲し」(巻之四十三・幻)といふ、『宇津保物語』の「言の葉の露をのみ待つ空蟬もむなしきものと見るがわびしき」(巻之八・祭の使)などは、人の身を空蟬とみるより、空蟬の世とひろがり、それを「うすきもの」「うきもの」「わびしきもの」「悲しきもの」「儂きもの」とみてきたのである。

「空蟬」は、蟬のもぬけのからのことだがそれを「うつそみ」とも書き、「うつしみ」(顕身)の転とし、空蟬と一つに観念した思想の伝統があったことを忘れてはなるまい。

それは「身体」の意の「身」というものに関してもそうであった。

身は早く亡きもののごとなりしを消えせぬものは心なりけり(伊勢)

厭へども限りありける身にしあればあるにもあらであるをありとや(和泉式部)

もの思へば澤の螢もわが身よりあくがれいづる魂かとぞ見る。(同)

雲となり雨となりても身に添はばむなしき空を形見とや見む(小侍従)

いずれも、古代の身体論である。「むなしき形」が、この世の現身である。これらの例は切りがないのであるが、こうした身体への考えは、本来の日本人の考えであったが、仏教の影響をつよく、さらにその上加えたのであろう。

ニギノミコトが、黄泉でみたものは、「よも

つしこめ」であった。『書紀』では、「魂女」の字を与えている。またニニギノミコトが「麗しき」コノハナサクヤヒメを撰んだために、姉のイワナガヒメの寿命を拒まれてしまった神話も、美しき肉体の薄命を、古代日本人は識っていたことになる。

つまり、身体は、魂の、あるいは永遠という象徴をもった生命の仮りの宿であり、「魂の入れ器」ではなく、魂の脱けがらなのである。

したがって永遠という存在感がない。

仏教のことはよく知らないが、仏教で、肉体を否定するのは、身体から発する欲望、肉欲の否定にはかなるまい。おそらく大乘仏教の修行の一大事は、この現世の身体を基とした欲望の消滅にかかるものであろう。したがって、肉体を枯らすことが、一つの大きな目標でなければならないのであろう。

つまり、肉体は、どこまでも「仮りの宿」としての無色透明な、露の命の入れ器としてみる見方なのである。

白玉か何ぞと人の問ひしとき露とこたへて消なましものを（在原業平・『伊勢物語』）

草の上の露にたとへし時だにもこは頼まれじ幻の世か（『和泉式部集』巻二）

身体は、ここでは露に置き換えられている。

こころ当りが、道教などのいう仙人の枯槁、枯索を理想とするもの、生きながら即身成仏を理想とする木乃伊仏身となってゆくのであろう。

近世の奇僧一休禪師などは、さらに臍皮袋とまで肉身をみている。山東京伝の読本『本朝酔菩提』は、その第一頁に「臍皮袋図」を描き、「無常の風いたりて息たへ身の皮やふれぬれば、みな人毎にかやうに候。いかばかりの美人なりとも骨にかはることなし。ただ皮ひとへうへの迷ひはかなく候」

皮にこそをとこをんなのへだてあれ

骨にはかはる人かたもなし 一休

と一休の道歌を引用している。

われわれは、骨と皮の肉体は、西洋でも到るところでみている。それは刑上のキリストの像である。これなども、本来は肉体を軽視した魂の救済の形象化ではなかったかとおもう。

この骨と皮に着せる衣裳が「形見」である。

「影身」といった方がよいかも知れない。韓国のムーダンが、幾度にも、神のあるいは亡き人の衣裳を纏って舞うのは、本来、人間の肉体が、神霊の借りものであるからであろう。

日本の巫女舞が千早を着るのは、一種の裸ぎであると同時に、神格を宿らせるための身体となるためである。

また「色身」ということばがある。一休の『目無草』にいう。「ただ木のきれなどのごとく也。」

といい、色即是空、空即是色の心経を「色とは色身也」と説き、世界という幻の心が写し出したものが色であるとするれば、それは仮りの身体というものであるということになる。

かってギリシア・ローマを巡ったとき、女性美の彫像より、青年の肉体美を誇示したものの方がはるかに多いことを知った。オリンピックで競技を晴れの場所と考えた西洋の肉体美は、その基は戦場とつながるものではなかったか。

フランスの宮廷で発達したバレエも美の肉体の形体とその運動の競技にあったのではなかったか。

その技術の修練の団体的方法をみていると、日本舞踊の個人学習に較べて、そうした想いに捕われざるを得ないものがある。

コンクールは洋舞にふさわしくても、日本舞踊にとっては邪道であるように想われる。

いまは、そのわけを尽している暇がないが、モダンダンスは、そのバレエの競技性から開放されたことを意味するのではあるまいか。

この国の舞踊には、バレエにみるような競技性はなかったといっている。能などには、「立合」という、一種の勝負をいう語が、世阿弥などの時代にも使用されているが、それは技術だけをいうのでなく、芸能の道に勝か負るかということで、むしろ、観客や時とか場所などの問題に深く係っていたのである。

この国の舞踊のための身体は、訓練こそ必要とするものであるが、その肉体は、仮りの宿とすべき幽玄の器となること、俗肉を脱落せしむべきためであって、豊富な完全美を目的としてないことは、いみじくも暗黒舞踏家の土方巽がいった「舞踏とは命がけで突っ立った死体である」というのが、東洋の身体理念であったのではなからうか。

日本の舞踏家の祖の巫覡の多くが、肉体的に欠陥のある人々によって司祭された例もけって少くはない。生れながらにして、病弱な、一度は死線を越えた者が、舞踏家の資格を与えられることもある。土佐の山中の神楽の太夫たちのなかには、山仕事の重労働に向かぬ虚弱な孤独な夢みがちの体質の者になっているのだということも聞いたことがある。

おそらくそれは身体ばかりでなく、深く魂に傷ついたものが、仮り宿の身体を求めて、烈しい舞踊の始元へ戻す「魂振り」の運動、表現に、日本の舞踊は求められたのではなかったか。

☆和歌の資料を求めめるために、須永朝彦氏にお世話になったことを誌上を借りて、深く謝します。